

# 湊町・新潟の原風景 —芸妓から見た「にいがた」

原田健一（新潟大学）



1. 「新潟美人おけさ踊」(絵葉書)

## 1. 芸の道

現在の新潟市の島内は、江戸中期から明治中期にかけて北前船が代表する北海道と大阪を結びつける日本海の交通の発達があっただけでなく、それに連動するように、網目のように広がった信濃川と阿賀野川の内陸の水系が密接に関わって発展した。これらの水路は、陸路である長野、関東、会津を結びつけ、交通の要・中継地として繁栄した。こうした交通網の発達には、当然のことながら、物と人との流通を活発化させ、川沿いの停泊地に、そして、海と川が接合する港に、さまざまな宿泊や食事をする処を生み出し、遂には、花街を形成させた。

ところで、信州の中山道と北国街道の分岐点である追分宿で唄われていた馬子唄が追分節となり、北国街道を北上し、越後に入り新潟港で松前節となり、北前船の船乗りたちが港々に伝え江差追分になったとされる。

この歌のロードは、そうした道と川、そして海とが結ばれた結節点で生み出されたものだが、その結ばれをになったものは、物を運び、情報を伝える荷役の人びと、替女などの芸人たちであり、それを迎える宿場の人びと、飯盛女たちだった（竹内、2003）。

ところで、この飯盛女とは、食事の給仕や寝床の用意をするものであり、時に客を楽しませる芸を披露し、また、身を売るものでもあった。料理を出し泊まるのが宿泊所で、芸を見せるのが芸妓で、身を売るのが娼妓だとすれば分かりやすいが、近代以前において、旅をする物流と経済、そして文化はあいまいに結びつくことで成り立つ。日本における近代化とは、こうしたあいまいさを分化していくことでもあった。

江戸時代、新潟湊において遊郭が形成されていたが近代化のなかで、1872（明治5）年「泊茶屋抱女並に養女等にして事実娼婦又は芸妓を渡世とする者を一般に飯盛女と称へしめたることあり。その後遊女屋は貸座敷と称し、遊女は娼妓・芸 ▶

▶ 妓と両別するに至りしが、普通には娼妓を子供衆、芸妓を芸者又は町芸者・女芸者と云ひ、外に色芸兼売のものを歌舞遊女等呼び區別」(新潟市役所、1973,655)していたが、1881(明治14)年7月に新潟県会にて歌舞遊女の廃止が決められる。また、1879(明治12)年6月「芸妓は貸座敷にあらざる家屋に居住すべきを命じ娼婦と隔離す」(新潟市役所、1973,664)ることになり、芸妓置屋が始まり、これが制度化していく過程で三業としての料理屋、待合、置屋が発展する。

ここで三業について簡単に説明しておく、置屋とは芸娼妓を置き(後に芸妓置屋と娼妓置屋に分かれる)、自分の家で客を遊興させるのではなく、料理屋や待合からの依頼を受けて派遣する処であり、待合はこうした芸妓など呼んで人を接待し、料理を直接提供することはないが、泊まることのできる場所であった。それに対して料理屋は、寝泊まりすることができないが、芸妓の接待とつくった料理で饗応する。

ところで、『東北時報』1929(昭和4)年11月3日付の記事によれば、芸妓の数は、14歳から55歳まで391人。20人以上

の高原状態は16歳から24歳までで、245人で63%を占める。残りの37%が25歳以上で、しかも途切れることはない。一方で、娼妓の数は19歳から37歳までで390人。20人以上の高原状態は19歳から26歳までで、344人で88%を占める。27歳

13人、28歳14人、29歳8人、30歳4人、31歳1人、33歳2人、34歳1人、35歳1人、37歳1人となる。30才以上は10人と少ない。同じ接客業であっても芸を売ることにはそれなりの熟練度が求められ、また客もそれを求めたといえる。さらに女給の数をみると15歳から29歳までで288人、20人以上の高原状態は17歳から24歳までで、250人で87%を占める。25歳8人、26歳4人、27・28・29歳各1人である。娼妓と同じような年齢構成ではあるが、女給の方が、さらに若さが売りとなっていたことは明らかであり、しだいに性的な商品として消耗品扱いにされていったことがみえる。なお、芸妓、娼妓、女給の総数は1,069人である。

また、芸妓の組合別にみると、1934(昭和9)年では、新潟上組芸妓組合(古町、西堀前通、東堀通八、九番町 西堀通八番町)約300人、新潟下組芸妓組合(新潟遊郭内)約30人、沼垂料芸組約60人 総計約400人の芸妓がいた。



2. 「人か花か」(絵葉書)

## 2. 芸妓の表舞台—観光

ところで、2011年4月新潟市歴史博物館で『“新潟美人”展』がおこなわれた。その内容は芸妓を中心にした展示で、「新潟美人の美人観をつくりだしたのは、新潟町の名妓・美妓たちです。そのため新潟美人という呼称も、新潟町の芸妓に向けられたものでした」(小林、2011,10)としている。「富士山、芸者」は外国向けに使われる日本イメージの常套句であるが、同じ事が日本国内において再生産されたオリエンタリズムの一種ともいえる。展示されたおびただしい錦絵、写真、絵葉書といったものの背景には、それらの映像を見て買う消費者がいる。それは、メディア化された人びとの一般化された欲望であり、それを体現する大衆の存在を表す。当然のことながら、こうした大衆の欲望に見合っささまざまなパターン化された表現のコードが創られる。それは良くも悪くも芸妓を売る側の視線をもとにし、商品化したものであり、あくまで写す側が表



3. (左)「西堀と柳と芸者」1950~1951年 NM-P-044-057-01 中俣正義写

現のイニシアティブを握って創られたものとなる。

1900(明治33)年私製葉書が認められて以降に作られた、絵葉書化された芸妓たちの映像を見てみると、ここで形づくられた通俗化したイメージ、芸妓(芸者)が代表する美人イメージは、そのまま、現在のCMにおける美人像や、アイドルまで通底する水脈となっているといってもよい。

また、そうした美人への憧れは、実際にそれを見てみたいという願望へと転化し、人びとを呼び寄せるものになる。交通の結節点に現れた芸妓が、観光の目玉へと転換していくのは客商売の必然ともいえる。1688(貞享5)年、「京都で出版された『諸国色里案内』に「にいがた、なるほどゆたかなるミなどにて、小うた・しやみせんあり。しゆらひ(集札)百文、三百文までなり」とすでに紹介され、「江戸時代後期から幕末には、新潟を訪れる男の多くは芸者や遊女を楽しみにしてい」(伊東、2011,6)たとする。こうした構造は、現在においても、再生産されており、今なお、新潟の観光の目玉として芸者は登場する。

### 3. 芸妓の舞台裏-料亭

芸妓にとって美人や観光が表舞台の顔なら、実際の芸妓たちの仕事場は料亭であり、そこでの接客となる。料亭での芸妓がどんなおもてなしをしているのか、中俣正義が1958年5月27日、料亭金辰での酒宴の様子を組み写真にしてみとめているので、それを見てみよう。ここでは、芸妓の接客のプロとして ▶



4. (右)「芸者」1950~1951年 NM-P-044-034-01 中俣正義写



5. NM-P-041-088-02



6. NM-P-041-088-20



7. NM-P-041-089-25



8. NM-P-041-089-89



9. NM-P-041-089-28

の姿が写し出されている。当然のことながら、6畳ほどの小さな部屋が芸妓たちの仕事場である。そこでは常日頃の生活空間とは異なった世界があり、お客は俗世間とは違ったルールで動く。無礼講というのは、こうしたことを意味する。

ところで、芸妓たちの主戦場は料亭という舞台が設定されるが、そこには、小さな舞台裏が存在する。通常、客にそれが明かされることはない。そうした現実を映像化したのは、行成亭の四代目松次良による16mmの動画である。新潟市中央区西大畑町にある鍋茶屋と

並ぶ新潟を代表する老舗料亭の行形亭は、1750年頃、海岸ばたであった現在の場所に、料理屋を始め、最初は浦島屋の屋号であったが、三代目から行形亭となり松次良と名のり、現在は六代目である。ここで写されるのは、行形亭の帳場であり、そこで一服する芸妓たち

の何気ない姿がある。松次良の視線は明らかに業態は違っても同業者への、それとなく気配りをしている温かな目である。そこには仲間意識があるといつてよい。

#### 4. 表現者としての芸妓と子女 — 踊りを修練する市山流 —

江戸時代、日本舞踊は歌舞伎舞踊を中心に発達し、その歌舞伎における舞踊的要素の拡大にともなって、18世紀初頭には振付師が必要とされるようになったとされる。俳優から振付師への転向者は、志賀山万作が最初とされ、その後、西川仙蔵、藤間勘兵衛、市山七十郎らが出るにことなり、さらに劇場以外の人びとにも教えるようになり、舞踏の各流派、家元が生まれることになった(戸部、1986,129)。

ところで、市山流は、江戸時代中期、大阪の俳優市山助五郎の弟子であった市山七十郎が舞踏に長じていたため振付師に転向したものだが、初代の長男は狂言作者の初代瀬川如臯で、弟は若女形の三代目瀬川菊之丞であった。その後、二代目は菊之丞門弟の市山兼次郎が継ぎ、三代目は踊りに秀でた岩井仲助になった。三代目は新潟湊が天領となった1843年頃に、新潟に拠点を移すことになる。新潟の花柳界が発達していたこと、さらには江戸、大阪・京都にも文化的につながっていたことがあったと推測される。どちらにしても、日本舞踊の家元は東京、京都、大阪、名古屋の4都市を拠点にして

おり、それ以外の地域では新潟の市山流だけである。市山流は2003年に新潟市の無形文化財第1号に指定されている。現在も、市山流は歌舞伎の振付も行っているが、家元として芸妓だけではなく、多くの子女にその踊りを教えている。

市山宅に残された多くの写真は、年代は1930年代以降のもので、写されている人びとは、踊りの修練をした芸妓や子女たちの舞踊会などのハレの場所の記念写真であり、撮影は主に和田写真館が行っているものである。これらの写真



10. (左) 帳場 11. (右) かつろぐ芸妓「あれこれ」1930年代 IY-M-035

に興味深いのは、写す側(和田写真館)が何かを表現しようとしているのではなく、写される芸者や子女たちが自らの得意とする演目のここぞという場面を自ら選んで、写させている点にある。表現しているのは被写体の方であり、映像の主体も芸妓や子女たちにある。写される対象であった人びとが、自らを表現する側へとイニシアチブを舵きりしているのである。ここには、踊りに対する長い修練の時間が込められている。芸妓が芸を見せるものであり、誇らしさもそこにある。ここでは、幾層にも創られたイメージでしかなかった芸妓が、自らこうありたいという主張を再び、映像の側へ、さらにはメディアの側へと返している。彼女たちの写真が「POST CARD」の紙に焼かれているのは、多くの顧客に対して贈るものであったことを示している。それは小さなメディアであるが、親密で自分たちの誇りと思いを伝えるものである。芸妓が、再び、現実の日常生活へと向かおうとしている姿を示している。 ■

#### 【引用文献】

- 伊東裕之、2011『“新潟美人”展図録』新潟市歴史博物館
- 小林隆幸、2011『“新潟美人”展図録』新潟市歴史博物館
- 新潟市役所、1973『新潟市史』下巻 名著出版
- 竹内勉、2003『追分と宿場・港の女』本阿弥書店
- 戸部銀作、1986「振付師の存在」『舞踊名作事典』演劇出版社



12. ID-P-006-461 五代目市川七十世



13. ID-P-006-573 「木賊刈 (とくさがり)」梅沢稲千代



14. ID-P-006-050 「かさね」



15. ID-P-006-537 「五大力」